

「勤労働員と空襲」 田中一枝氏

田中さんは、昭和 3 (1928) 年、東京市本郷区汐見にお生まれになりました。女学校時代の勤労働員の様子や空襲の体験を語っていただきました。

高等女学校 3 年の昭和 18 (1943) 年から本格的に工場動員が始まり、小石川の凸版印刷や板橋の萱場製作所で軍需物資づくりに従事した。出勤時は戦闘帽に「神風」と書かれた手ぬぐいをして、門では兵隊さながらの敬礼をした。工場へは休みなく通い、まさに月月火水木金金の生活だった。昭和 20 (1945) 3 月 5 日、朝 8 時頃、ラジオのニュースで「御前崎付近から敵機が侵入」と放送があった。買い出しに出掛けた両親が不在の中、姉と二人で空襲警報が解除されるのを待った。姉が「飛行機はどんなふうに来て来るのかしら」と縁側から空を見上げたとたん、「ザザザザ・・・」という大きな音とともに家が 40 センチから 50 センチ上下に動いた。ガラス戸は全部割れ、電気・ガスは止まり水は出ない。近所では火事が発生。夕方になって両親が帰ってきた。後日、自宅周辺に 64 発の爆弾が降り注いだことを知る。怖くてたまらず、埼玉県の大塚の親戚に一時疎開した。どこの国でも戦死は幸せではない。隣の人や外国の人に対しても広く思いやることが大事。戦争は二度としない方がいい。

(講演の内容は、「資料館だより」から転載しました。)